

第1章 研究の背景

第4節 渡島情報教育研究会の歩み

渡島の情報教育は、渡島情報教育研究会の活動に寄与するところが大きい。この節では渡島情報教育研究会の設立と、その活動について触れていく。

1.4.1 渡島情報教育研究会の設立（平成3年～4年）

平成3年、筆者が恵山の東光中学校に転勤してきた。初めての中学校勤務。そして、英語の教員として、また、初めての進路指導の担当となって、慣れない仕事に忙しい日々であった。自分史でも述べたが、学校にコンピュータが入る予定があるとのことで、かなりの業者の方が、筆者のもとを訪れた。日高時代に経験はあるものの、コンピュータ室の使用から、コンピュータのネットワーク、中学校用のソフトなどの導入は筆者も始めてで、資料をもとに選定を進めていった。このような日々の活動で強く感じたのは、「自校だけで悩んでも生まれるものは少ない。渡島の先生方がそれぞれの学校の知恵や悩みを出し合い、研究を進めていかなければならない。」と思った。

筆者は、まず、高校、大学の先輩であるI先生を訪ね、その構想を話した。今でも覚えている本通の明治パーラーである。そして、渡島視聴覚教育研究会を紹介してもらい、幹事長さんと会った。当時は渡島視聴覚研究会の活動は、学校放送、OHPなどが主流で、コンピュータについては、まだ研究の対象外であったようだ。筆者の構想と当時の視聴覚教育研究会の活動には「ずれ」があり、筆者の思うような研究活動をやっていくのは難しいかなあと思った。

その後、草の根BBSが立ち上がり、筆者も仲間に入れていただき、研究会設立の構想などを語った。また、当時たくさんのBASICのプログラムを作成し、教育利用を図っていた谷川小学校のH校長(当時)を訪ね、その構想を語った。H校長は、筆者の話に大きくうなずいてくれた。

その冬に有志が立ち上がり、渡島の情報教育に関する研究会を立ち上げようと会合がもたれた。今の大学の近くのハリカの2階であった。当時は、情報教育というよりもパソコン研究という名前の会が多かっただけに、その時のスタッフは、先見性があったなあとなってしみじみ思う。初代の幹事長は、茂辺地中学校(当時)のI先生、筆者は、副幹事長に立候補した。会長にはH校長の了解を得、人づてに38名の会員を集め、平成4年四月、設立総会が開かれ、会がスタートした。

時を同じくして、渡島の教科・教科外の研究会を束ねている渡島教育研究会連絡協議会にも加盟し、当時23団体あった団体の一つになった。

その年は、I幹事長、M先生が勤務していた茂辺地中学校でのコンピュータ操作実技講習が活動の中心になった。当時はまだMS-DOS真っ盛りで、コンピュータにフロッピーを入れて立ち上げるという使い方であった。ブラインドタイプの仕方や、メニュー画面が

らのアプリケーションの起動、MS-DOSの基本コマンドやフロッピーの編集、バッチファイルの作成などの技能を学んだ。

1.4.2 平成5年度

会長がH校長から、上磯町立浜分中学校のS校長(当時)に代わった。暮れも押し迫った12月、東光中学校のコンピュータ室落成のこけら落としとして情報教育研究会の研究大会を開催し、筆者が授業を行った。技術家庭の情報基礎で、子どもたちにグラフィックソフトを使わせて、恵山の名物を書かせるという内容であった。当時としては渡島で最新の設備が導入されていたこともあり、内外から多くの参観者を迎え、授業をすることができた。この年に研究紀要の第1号を発行した。

年が明けて、平成6年に入った冬休みに、I幹事長に呼ばれ、「次の幹事長は、先生だからな。」と言われ、その場で引継ぎが行われた。筆者はびっくりしたが、その志は、会が創立した時からあったもので、快く受けた。この後、若さとエネルギーで次々と新しいことをやっていくことになる。

1.4.3 平成6年度

会長が、砂原町立掛澗小学校M校長(当時)幹事長が東光中学校(当時)の筆者となり、このコンピが以降6年続くことになる。

筆者が幹事長として、まず、力を入れたのは、実技講習会である。当時はまだ、職員室にコンピュータが入った程度で、児童・生徒用に導入されている学校は多くはなかった。筆者は、まず、先生方がコンピュータの便利さ、有効性について、知ってもらうことが、子どもに指導していく上での根本と考えた。コンピュータをさわろうとしない先生が情報教育に携われるわけがないと思ったからである。

このような経緯で始めた講習会は、一日にいくつかのコマを設け、実践発表をしてもらうというものであった。平成6年の夏、冬の実技講習会では、ロゴライター、天文シュミレーション、ミュージ郎、算数の自作プログラム、FCAI、時間割作成について、講習した。講師は、それぞれ、先生方が学校で活用できそうなものを選び、そのソフトを使いこなしている方々に、そのソフトの魅力について語ってもらい、その操作の一部を体験してもらおうというものである。中には、情報研の会員以外の先生もいらっしたが、筆者の強い押しで、お願いし、また、講習原稿までも事前に書いてもらったということもあった。今思うと、ずいぶん強引なことをやったものだと思いきりである。

筆者が最初に講習したのは、算数の自作プログラムであった。当時としてはまだ、小学校用にアプリケーションソフトは多くなかった。筆者の自作ソフトということで、著作権に触れずに、お持ち帰りいただけることが嬉しかった。筆者は、大学時代からプログラムを組んでいた。だから、現場の先生になっても、教育用ソフトを開発することができた。でも、教育用ソフトが必要だからといって、誰でもが、できるようなものではない。筆者

は、教育用ソフト開発のために、現場の先生がプログラム言語を勉強するなどということはないと思うし、また、そのような時間があったら、あるものをどう使えばいいかを考える時間に使った方がいいと思う。自慢するわけではないが、自分の手塩にかけて作成した小学校の数と計算領域の全学年分が一枚に収まったソフトは筆者の大きな財産であったし、多くの現場の先生に使っていただければと思ったわけである。

冬の講習会で、時間割作成について、講習を行った。ご存知のように中学校では教科ごとに先生が代わる。また、特別教室、連続時間などがあり、時間割を作ったことのある先生ならその苦労はわかると思うが、結構むずかしいパズルである。当時教務主任として、適正な教育課程を実施していくために、この時間割作成ソフトを徹底的に活用した。その観点として、補欠授業は原則として作らない。なぜなら、補欠に行っても、プリントをさせるぐらいで、実質上、生徒の学力向上につなげる要素は低く、また、学校に戻ると丸つけをしなければならぬプリントの山となる。出張、年休などで学校を空ける場合は、その週、または、前後の週などの時間で調整する。仕事で用があつて学校を空けても、その授業は自分にかぶってくる。しかしながら、に掲げたようなデメリットがあり、先生方は何一つ文句がでなかった。適切な時数が確保されるように原則の時間割をもとにしながら、先生方の要望も取り入れて、毎週時間割を編成していった。端的にいうと通年を通して固定時間割をもたなかった。次の週の先生方の動きを把握し、また、「連続した時間がほしい」、「テスト前なのでできるだけ授業をいれてほしい」などという要望を聞き入れ、毎週木曜日までに次の週の時割を作った。授業が多く入れれば、フルタイム（1時間目から6時間目まで空き時間なし）と呼ばれた状態も考えられる。この時間割作成に関しては、自分で言うのもおかしいかもしれないが、芸術的に駒を埋めるセンスが身についた。多少の無理を言われても、フルタイムを避けた時間割を作れる技能を持つにいたったのである。

話が横道にそれたが、短い時間ではあつたが、講習会では、筆者の使っていた時間割作成ソフト、創育の「時恵」について、参加者と実習しながら、時間割ソフト導入の有効性について語った。

限られた時間で多くのことを伝えようとする。それ自体とても無理がかかる。この講習会を企画するに当たって、講師の先生方に、そのソフトの魅力をじっくり語ってほしいとお願いした。そして、操作について、みんなで一緒にできるおいしいところを、丁寧にやってほしいとお願いした。この講習会で、筆者は、いいソフトに巡り合うきっかけになればと思っていた。「これは使える。」と思ったソフトがあれば、学校で購入するなり、講師に連絡をとるなりして、自校で利用することにもつながっていくと考えたのである。だから、短い時間ながらも多くのソフトに出合えるような方式をとったのである。

1.4.4 平成7年度

この年、視聴覚の大会で、森中へ行って、K先生の情報教育の授業を見た。その時、森中のパソコン教室に子どもたちのグラフィック作品がたくさん貼ってあるのを見て、「これ

だ！」と思いついたのが、コンピュータグラフィックコンクール（現在のデジタル作品展）である。さっそく会長に筆者の思いをぶつけると、「おもしろい。やってみよう。」ということになった。その頃、渡島のコンピュータのある学校に多く入っていたのは、スズキ教育ソフトの「ハイパーキューブ」であった。これは、一枚のフロッピーながら、ワープロ、表計算、データベース、図形処理が入っており、しかも価格もそう高くない当時としては非常に優れていた統合型のソフトである。当時は、グラフィックソフトと言えば、ハイパーキューブという時代であったので、渡島の学校に声をかけたところ、多くの小学校・中学校から作品が応募され、渡島各地で持ちまわりで開催される渡島教育研究集会で、作品展示をするにいった。

1.4.5 平成8年度

この年から、夏・冬の講習会を構想を変えた。時代は、スタンドアロン（ネットワークにつながらないで、そのパソコン一台で作業をしている常態）からネットワークに、そして、インターネット端末として利用されるようになってきた。

筆者は、北海道教育大学附属情報処理センター長（函館校）のN教授にお願いして、夏・冬の講習会をセンターで開催させていただいた。時代を振り返ると1995年（平成7年）にマイクロソフトよりWindows95が発売され、インターネットも少しずつ、一般世間のものになりつつある時であった。参加者の先生方の多くは、インターネットという言葉は聞いたことがあっても、見るのが初めてという方であった。今と比べると情報量も僅少ではあったが、文部省のページを始め、ちょっと軽い地元のお店のページなどを見たり、当時創業間もなかったYahooや千里眼などの当時の検索エンジンを使って、情報検索を試みたりした。筆者も初めての時はそうであったが、参加した先生方は、次々と欲しい情報が自分の目の前に表示されるインターネットを体験して、カルチャーショックというか、情報化社会の新しい幕開けに、驚いた様子であった。通信速度も今と比べれば、格段に遅かったと思われるが、ゆっくりながらも見たいページが出てくるのをじっと待っていたせいか、遅くてイライラしたという記憶はほとんどない。

この年から、平成11年度までは講習会はインターネットを中心として運営していった。会場としては、教育大の情報処理センター以外にも、アマチュア無線つながりでNTT函館支店のMさんに絶大な協力をいただき、東雲町NTT函館支店を会場に講習を行った。

1.4.6 平成10年

時代は、コンピュータをどう操るかということから、コンピュータでどのように情報活用能力を伸ばしていくかという考えに移っていき、会としても、「効果的なコンピュータの活用方法」から「情報活用能力をどのようにはぐくむか」と研究主題を変えていった。

インターネット講習会も、個人や学校で、インターネットに接続するところも増えてきて、参加者はうなぎのぼりに増え、夏、冬に複数の講習会をもつようになった。

1.4.7 平成11年

M 会長とはこの年まで6年間、会長、幹事長という仕事で、会を切り盛りしてきた。研究大会が開催されると決まれば、手土産を持ち学校を訪れ、講習会があれば、会場校にご挨拶に行き、そして研究紀要ができれば、教育局に持参して、会の活動を報告した。筆者自身若かったこともあり、30代の教員としてのエネルギーのかなりの部分をこの研究会につぎこみ、新しい事業を起こしてきた。新しいことを会長に報告すると、「よし、やっごらん。」といつも温かい励ましをもらった。また、出るべきところには、先頭に立ってくれ、会を守ってくれた。会のトップのあり方を筆者は学び、そして幹事長としての企画力、実行力を体で覚えた6年間であった。

1.4.8 平成12年

この年から、会長が戸井町立潮光中学校(当時)T 校長先生となった。T 校長ともアマチュア無線つながりがあり、20 年来のお付き合いがあり、会長、幹事長としての波長もぴったりと合った。筆者の家が銭亀で潮光と近かったこともあり、ちょくちょく学校へおじゃまして、打合せをしたり、パソコンのメンテナンスをしたりした。教育長のメール講習会を思いついたのも潮光の校長室だったように記憶している。

教育長のメール講習会は、壮大な願いがあった。それは、今までは草の根で先生方にコンピュータの使い方を説き、また、児童・生徒の作品展を開催して交流を深めた。いわばボトムアップの作戦だったわけである。それに対して、この講習会は、まさにトップダウンをねらったわけであった。国の施策で学校にパソコンが入る。しかし、パソコン購入やリースは、利用目的を限定しない地方交付税である。教育の情報化を進めるためには、トップの理解が不可欠と思っていたわけである。

それと、もう一ついいタイミングがあった。当時の T 育局長さんも教育の IT 化にはとても積極的であったのも今回の企画が通った大きな要因であった。

ともあれ、冬の町村教育長連絡会の研修の忙しい時間を割いていただいたの講習である。N T T に協力いただいて、研修室に教育長さんの数だけノートパソコンを設置し、無線 LAN で結び、講習が開始された。ほとんどの教育長さんが、電子メールについては初めてであった。ワープロは仕事からお使いになっている方も多く、文を打つにはさほど支障がなかったようだ。お互いメールの交換練習をすることができた。また、T 局長さんからの局長室から届いた教育長さん方への練習をねぎらうメールを読んで、教育長さんたちもにっこりしていた。アシスタントについた私たちも背広にネクタイという未だかつてないほど緊張した講習会ではあったが、大プロジェクトを成功させて、終わった後しばらくは、充実感で体の力が抜けてしまったのを覚えている。

このプロジェクトが学校への機器導入にどれだけ教育長さんたちの心を動かしたか、計り知るものはないが、その後、お会いした教育長さんから、「あの時はとてもためになったよ。」という話を聞くと、このプロジェクトもいい結果をもたらす原動力の一つになったの

かと思う。

情報教育を推進していくためには、教育機器の整備は必須条件である。会としては、時代の先端をいく研究授業を公開し、情報教育のあり方を提言し続けている。また、講習会を多数開催し、先生方の情報機器（コンピュータ、デジカメ、ビデオ）などのスキルアップを図り、そのことをきっかけとして職員室での利用が進み、さらに、児童・生徒の情報教育に力をいれていくということにつながっていくと考えている。また、一方教育機器の導入には莫大な費用がかかる。購入にしてもリースにしても、他の教材の何倍、また、コンピュータ室に児童・生徒分のマシンを入れたら、何十倍ものコストがかかる。限られた学校予算の中で、コンピュータ室を設備していくということは、トップの決断がいることであろう。今、なぜコンピュータが子どもたちにとって必要なのか、コンピュータではどんなことができるのか、そして、どれだけコンピュータを使って楽しいものであるかを体験するいい機会であったと思う。

一方、せっかく買った情報教育機器が、活用されないということもある。理由として、先生方でパソコンの使い方がよくわかる先生がいない。教師がパソコンを使った教育は必要がないと考えている。パソコンを使って指導している授業時間がない。生徒指導上の問題で、子どもたちに使わせたくない。調子の悪いマシンがある。壊れたら大変である。などが考えられる。忙しい我々教師にとって、これらの理由はわからないでもない。しかし、外から見ると、「あの学校の先生方は、せっかく買ったパソコンをちっとも使ってくれない。」ということになるし、「何千万円もかけているのに。他にもっと使い道があっただろうに」ということになり、学校が、また、設置者である教育委員会が攻められることになる。議会で質問され、緊急調査が入ったという話も聞いたことがある。我々教師は、「まず使ってみよう」という思いで、授業に情報機器を取り入れていくと共に、「ああ、使ってよかった。」と思えるような実践をするために、情報教育について学んでいく必要がある。会としても、そのような先生方をサポートしていくために、日常的な技術サポートとまた、研究会、講習会などでの先生方のスキルアップを支援しているのである。

また、このあたりから、研究会の日常の連絡はML（メーリングリスト）を使って行うことが多くなった。情報研役員用、そして一般会員用の2本立てで、情報の共有を図った。MLというものは、便利である。そのMLを構成する仲間に、一つのアドレスで、全て届く。筆者もいくつかのMLのメンバーに登録しているが、MLによってかなりその性格が異なってくる。あるMLは入会、退会も自由。書き込みも匿名で可である。また、あるMLは、入退会は管理者が行う。MLメンバーで管理体制を作り、内容が乱れると注意また、場合によっては強制的に退会させられる。あるメールはROM（read only memory～書き込みをせずだんまりを通す）が極端に嫌われる。メールの量が一日に何十通も飛び交うものもあるし、月に何回、年に何回というものもある。これからも情報研のMLはうまく活用していきたい。

講習会も大改革をしていった。それまでのインターネット中心から、目的別の講習会も

加えていった。夏は、2回のインターネット、エクセル、ワード、ホームページ、冬は、表計算、サーバー管理、プレゼンテーションと行った。どの講習会も「読み」が当たったと見えて、とても多くの先生で熱気あふれる講習会となった。

多くの学校にもコンピュータが入り、先生方の机の上にもノートパソコンが載っていることが多くなった。そこで、代表的なソフト、これから是非身につけてほしいソフトなどの講習会を開設していった。エクセルはこの後詳しく述べるが、校務には絶対欠かせないソフトである。

また、ワープロソフトであるワードについても取り上げた。先生方のワープロとの出会いは、このワードとの出会いより早い場合が多い。つまりワープロ専用機を使っていたのである。その昔はたった一行の液晶表示であった。それでありながら、表を作っていたのはお見事というしかない。そんなワープロ専用機の始まりであったが、比較的廉価であること、また、感熱紙によるプリンターもついてきたこともあって、かなりの普及率であった。ワープロも使い込むと手に馴染んでくる。「そろそろ、もうワープロ専用機の時代ではない。」と思いつつも、忙しい日々の仕事で、わざわざ、馴れていないパソコンに切り替えようという気持ちもなかなか起こらない。無理もないし、わかる。筆者もそうであったから。その一方、コンピュータのワープロは、Microsoftのワード、そしてジャストシステムの一太郎の代表的な2つに集約されたが、それらの機能は、バージョンアップごとに高まっていった。専用機の性能を完全に上回ることになる。変換能力、編集能力、図や表の貼り付け、他文書との変換など、性能を増していった。また、ワープロ専用機は文書保存をフロッピーディスクにするわけだが、メーカーによって互換性がないという弱点もあった。ワープロ変換ソフトも出ていたが、罫線や半角などの変換ではどうしても、無理が生じる。年度末の分掌の文書引継ぎなどでは、フロッピーが職員室間を飛び交っていたが、件のように、うまくいっていないものもあり、かなりの部分を手直ししたり、もう一度打ち直したりするなどということもあった。

パソコンで使えるものにしていくというのは、時代の流れから見て、妥当なものだと考える。学校は組織であり、必ず引き継ぎがある。情報の共有を考えた時、既存の文書を打ち直すというのはあまりに効率の悪い業務体制と言えよう。

会社などでは、ワープロをワードに一本化しているところもあるという。筆者は学校現場まではそこまでする必要はないと思う。ワードと一太郎間の互換はかなり優れていて、不便を感じることはない。

学校の先生は、ワードを使いこなすまでいく必要もないであろう。我々教師が一番、文書作りで表現力を使うのは学級通信であろう。タイトルの文字、小見出し、写真や時間割などの表程度の機能を使いこなせれば十分であると思う。文書の入力はできても、それに写真を切り貼りしている先生を見かける。デジカメで取った写真はいとも簡単に、ワープロに取り込める。また、大きさ、明るさなど自由に調整できる。そんなちょっとしたポイントなどを紹介していこうと思ったのが、このワープロの講習会である。

エクセルについては、筆者はこの頃から、非常にこだわりをもって講習会を進めた。今でも講習会名を「伝統のエクセル講習会」としている所以である。エクセルはご承知の通り、表計算ソフトで、Microsoft Office には必ず入っているものである。ワープロソフトであるワードはほとんどの方が使ったことがあるにしても、エクセルは聞いたことがあるけれども使ったことのないという方が多かった。筆者はハイパーキューブ時代に、表計算というものを覚えた。そして、校務においても成績処理に活用した。校務において、これほど便利なソフトはないとその時から思っていたのである。エクセルが次第にパソコンソフトとして使われるようになった時、本を買い込んで勉強した。幸いBASICのプログラマーであったことから、文字列操作をはじめとした関数は、聞いたことがあるのが多く、複雑なものでも、それなりに早く理解することができた。校務のできることを、徹底してエクセルを用いて表を作り、それを自校の先生方に提案していった。成績処理、時数集計、年間日数の計算、時間割、週予定、PTA予算書、来賓名簿、児童名簿、PTA名簿、地区別名簿などなど。エクセルにすることによって、必要な計算がリアルタイムにできる。また、ワードと連携して、宛名印刷ができる。統計処理ができる。まさにエクセル様々である。自校の先生に伝えるだけでなく、これを広く渡島の先生方にも知らせたい、電卓片手に苦労して成績をつけているのが自動計算になる、そんな思いで、テキストを作成した。案内の「目から鱗」などのうたい文句が良かったのか、エクセル講習会にはたくさんの先生方が来た。まずは、5教科の平均と合計。これはエクセル指導の定番である。受講者たちが、氏名、教科、点数を入れる。そして、シグマによる合計。エンターキーを押すと、瞬時に合計が算出される。「うわー。」という感動が起こる。国語の合計が出れば式をコピーすると、社会も算数も、理科も、英語も瞬時に答えがでる。個人の合計も同様に瞬く間に計算される。そしてもう一度受講者が感動するのは再計算である。得点を変えると、縦も横も瞬時に再計算するのである。電卓であれば、縦、横、やり直さなければならない。講習会のアンケートなどでも、この講習会に来てとても勉強になったというような感想があるとやはり、うれしい。その後しばらくの間は、毎年エクセルの講座を開き、テキストも改訂しながら、「エクセル教」を布教することになる。

ホームページ作りについては、ホームページビルダーを利用した。ホームページ作りはやってみると簡単、でもやったことのない人にとっては、すごく難しく感じるものではないだろうか。自分の作ったものがインターネットに上がるというだけで、「あーきっと難しいんじゃないかなあ。」と思ってしまうようだ。事実、筆者もこの技術を覚えるまではそうであった。当時、それぞれの学校でも学校のホームページを立ち上げようとしているところが多かった。「ホームページは難しい。」という固定概念を吹き飛ばそうとしたのがこの講習会である。

ホームページ作りは、大きく3つの段階に分かれる。一つは新しいページに文を書いたり、写真を貼ったり、ロゴ(飾り文字)を入れたりして、一枚のシートを作ること。二つめは、それぞれのページにリンクをかけること。このボタンを押したら、こちらのページ

にジャンプするという命令を書けることである。そして三つめが、完成したこれらのシートをインターネットで見ることができるよう、WEBに上げることである。

一つめについては、ワープロとほとんど同じであり、ほとんどの先生が楽しくできた。二つめのリンクもたいして難しくはない。問題は三つめのWEBへのアップである。この三つめを実習しないと、参加者のホームページの不思議が解決しない。そこで、我々は、無料ホームページに目をつけた。G O Oであった。登録をすると、誰でも無料で、一定の容量のホームページを持つことができる。一度目の講習会は、G O Oを使って自分のホームページの場所をWEB上に確保することを行った。ちょっとややこしかったが、クリアすることができた。あとはF T P（ファイル転送プロトコル）を使って、作ったものをWEBに上げるだけでよい。自分の作ったものが左に出て、インターネット上の自分の場所が右に出る。ファイルを選択して、アップロードのボタンを押すと、ファイルが転送されていく。それが終わってから、おもむろにインターネットエクスプローラで自分のURLを打つと、自分の作ったものが表示される。ただし、無料という性格上広告が入る。そこに感動が生まれる。隣の先生のホームページのアドレスを聞いては、打ち込み、感動を分け合っている。

一度ホームページの理屈がわかると、あとは、どのように作って、どのように運営していくかである。ホームページのあり方についていくつか大切であろうと思うことを述べる。一つは情報の更新である。ホームページは生の情報が命である。学校ホームページで前の校長先生の挨拶が出てくるようなものは、許されないと考えている。その位なら、公開しない方がいいと思っている。日々の業務多忙で、その更新にかかる時間は限られているのは重々承知の上で、週に一度、また、最低でも月に一度は、学校の様子を伝えるようなホームページであってほしいと思っている。次に内容である。誰に向けて情報を発信していくかということであるが、筆者が一番大切なのは地域、保護者に対してであると考え。そうするとまずと学校ホームページに求められる内容も決まってくる。子どもたちが学校でどんな学習をしているのか、どんな生活をしているのかがわかるものが好まれるであろう。そして、ページもあまり凝ったものにしようとするとう長続きしない。簡単な説明と数枚の写真で構成すれば生き生きとしたものができると思う。ただし、時節がら、子どもの顔写真や名前などの個人情報については、事前の広報や承諾に細心の注意を払うことを忘れてはいけない。最後になるが、ホームページ作りは楽しみながらやってほしいということである。相手が見て楽しんでいただける顔を想像しながら、ちょっとした情報を伝えていく気持ちが大切だと思う。

今、特色ある学校作りが求められている。その中の大きな柱として、地域社会や家庭と学校の結びつきがある。親が得ることができる学校の情報は、子どもの話、学級・学校通信、授業参観、家庭訪問、P T A活動などがあげられよう。それに加えて、学校の日々の活動をネット上で閲覧でき、それがどういう目的で、子どもたちがどう成長していったかなど、ちょっとしたコメントで、学校に対する信頼も高まるであろう。また、子どもを通

わせていないとなかなか学校の様子が伝わらないであろうが、学校ホームページを通して、「地域の学校」を知ってもらう大きな情報源となるであろう。「開かれた学校」に、学校ホームページは大切な情報発信の手段であろう。

プレゼンテーションは、Microsoft のパワーポイントを使った。パワーポイントは、ワープロや表計算、ホームページに比べると、奥はない。簡単にできるということである。プレゼンテーションは、人の前で話をする時に、資料を提示するためのものである。一昔前であれば、OHP、また模造紙、黒板(ホワイトボード)にとって代わるものと考えていただければいい。

学校では、保護者懇談会、新入生説明会などで効果的に使うことができよう。また、小学校の高学年または中学生にもなると、総合的な学習などの発表物を自分達でまとめて、発表するのに使うことができるだろう。授業でも即戦力になるという意味では、価値の高いソフトである。

パワーポイントは、ウィザードを使って操作を進めていくと実に簡単にプレゼンテーションができあがる。文を入れるのも、図を入れるのも、ワードをさわったことがある方であれば、すぐに類推がつく。このへんはオフィスの兄弟ソフトであり、よくできている。加えて、動画クリップも貼り付けることができる。OHPでは真似のできないことである。入学説明会で、学校の一年の様子など、短いクリップでもまとめれば、学校生活を言葉以上に生き生きと伝えることができるであろう。

デザインもたくさんの中から選択することができる。また、文字の提示方法や画面の切り替え、切り替え時の音なども豊富である。ともすれば、パワーポイントを使った発表では、「あの切り替えはどうやったのだろう。」「こんな技法もあつたんだなあ。」などと、本質と違ったところに感動することもある。ある学会では、必要以上の効果を使うことを禁止したなどという話も聞いたことがある。

ともあれ、パワーポイントは、少し使ってみると、その気軽さがよくわかる。気軽な割には、発表の効果を高められる道具として、とても重宝なものである。

関連するが、パワーポイントを使うには液晶プロジェクターが付きものである。以前は吊り下げ方式が多かったが、今では小型で持ち運び可能なものが廉価で出ている。最近では小さくても光源が非常に明るいものが多い。一昔前の少し大きいタイプであれば中古市場にも出回っており、10万円を切る価格で入手できることもある。中には、学校でのプロジェクター利用の調整をきらい、マイプロジェクターを手に入れる先生も多くなってきた。

サーバー管理も、会員の要望で始めた。職員室でスタンドアロンで使われていたパソコンであるが、しだいにLAN (local area network) を組むようになってきた。そうするとネットワーク管理も必要となってくる。会員限定ということで、合宿をしながら、酒を酌み交わしながら、温泉に入りながらの夜な夜なの講習となった。

筆者はサーバー管理については、あまり詳しくはないが、簡単なLANは組むことがで

きる。筆者は何校かで、職員室また、校内LAN工事を行った。それにより、どのパソコンからもインターネットに接続でき、WEBを見たり、メールの送受信をしたりできるようになった。また、一台のパソコンをファイルサーバーとして共有し、ネットワークにつながる全ての先生から、そのファイルを読み書きできるようにした。また、学校のプリンターを先生方みんなでも共有できるようにした。このようにネットワークは確かに便利である。その一方で、コンピュータウイルスへの対応や児童・生徒用パソコンと職員室パソコンの切り離しなど、技術的な面の管理が求められるようになってきた。ネットワークは正常に動いているのが当たり前で、ちょっと接続ができなくなると、校務に支障をきたす。また、これがウイルスに侵されて、外部からの浸入によって、またコンピュータ室の児童用パソコンから、学校のデータが漏洩したとなると大問題である。学校には守秘しなければならぬ個人情報や重要な機密文書がたくさんあるからである。

ここで考えなければならないのが、学校の先生がどこまで、コンピュータの管理をしなければならないかということである。学校の業務は校務分掌によって、分担して受け持っている。おそらく各学校においても、情報機器関係も、どこかに位置づけされているはずである。本校の場合も情報教育特別委員会が設置され、筆者が携わっている。本来ならば、コンピュータも視聴覚機器の一つであるから、テープレコーダーや放送機器と同じ扱いになってもいいはずである。ところが、本校の場合にあっては、文化部の守備範囲は、コンピュータを除く視聴覚機器という運用になっている。おかしいけれども、もったもである。コンピュータを維持・管理していくためには、それなりのスキルをもっていなければならない。コンピュータに関わる分掌になったからといって、簡単に引き継がれても、トラブルが一つあったら、わかる人を呼んでこなればどうにもならないという事実がある。特別な技術がなければできないような校務分掌があってもいいのか、時々疑問になることがある。転勤する時、次の担当の先生に、懇切丁寧に半日かけて、引き継いだとしても、コンピュータに明るい先生でなければ、トラブルがあった時に、お手上げになってしまうことは目に見えている。

話を戻して、「学校の先生がコンピュータの専門家である必要はない。」これは明確なことである。そして、学校のIT化は今後ますます進むという状況にある。学校のIT化が進めば、当然、わからないとか、つながらぬ、などのメンテナンスに関わる業務が生まれてくる。マクロな流れとしては、自治体などで、学校のITに対するサポート体制をとっていくことである。専門職員の配置や、トラブルがあった時、いつでも業者のSE(システムエンジニア)を呼べる体制にしていくということである。今後、地方自治体でネットワークを組み、教材を共有するというのも盛んになってくるであろう。そのような構想に向けても、しっかりしたサポート体制を作っていくことはとても大切なことである。

その一方、教職員もITの力をつけられるものであれば身につけておいた方がいいというのは筆者の持論である。今、一般に、企業が求める人材に「英語とコンピュータ」と言われるのを聞いたことがある。確かにそう思う。コンピュータを使いこなす能力は教職員

にもあってほしいものと思う。さらに、仕事とは少し切り離してでも、ネットワークの管理、外部機器とパソコンの接続、アプリケーションのインストールやアンインストール、設定など、ちょっとしたパソコンのトラブルなどに対応する力は、身につけておいてもいいものかと思う。筆者自身のことを話せば、コンピュータ設定にかかわるもの、ネットワークトラブル、接続に関わる相談、パソコンや周辺機器購入に関する相談など、様々な「教えて・助けてコール」が来る。最初の頃は、なんとなくパソコンが強いみたいに使われているところがあって、自信がないながらも、相談されてきた方と一緒に考え、トラブルを解消していった。でもそれが何年も積み重なっていくと、多少のトラブルは、何とかできるようなようになってきた。実際、手をかけて、諦めて帰ったのは数えるほどしかない記憶している。ここまでお人よし、コンピュータ屋さんをやるのがいいかは、別として、渡島情報教育研究会で、有志が集って、専門的なコンピュータに関わる勉強をするのはいいことだと思う。情報教育がコンピュータ技術ではいいことは100も承知した上で、このような研修会は、伝統としてやってほしいと思うのである。

1.4.9 平成14年

この年は、渡島情報教育研究会が創立して10年に当たる年である。いつもなら「周年行事なんか必要あるんだろうか」などと思っているのであるが、やはり自分が設立に関わった研究会の10年目の節目というところという気持ちにはならない。この年から、幹事長は白尻中(当時)のK先生に引き継いだ。7年の幹事長はやはり長すぎたと思い、新鮮な風が入ったほうがいいと思ったからである。計画は前年度の秋あたりから、始めた。構想としては、授業、研究発表、式典、それに講演と考えた。そして、講演は、はじめから講師の焦点を当てていた。北海道立教育研究所の所長(当時)の三浦先生である。三浦先生は、高校の先生で、情報に関わる高校の設置に携わるなど、情報教育に関わっては北海道の先駆者のお一人である。先生が渡島教育局の教育局次長だった時代に、筆者が研究紀要を持参した時、わざわざ若僧の筆者を呼んでくれて、話を聞いていただいた。私たち教員にとっては、教育局に入ることで、背広にネクタイで、びりびり緊張するところである。指導主事の先生とお話をするときでさえ、緊張の連続である。にもかかわらず、筆者としては、表現がおかしいかもしれないが、雲の上の人である次長さんに声をかけていただき、懇切丁寧に話を聞いて下さり、応援の言葉をいただいたのである。教育局から出て、目の前の五稜郭のお堀を見ながら、天にも上がるような嬉しい気分になっていた。もう10年ぐらい前のことである。それ以来、筆者は三浦先生が大好きになった。北海道の情報教育の組織を作ろうとした時も、話を聞いてくれ、力になってくれた。北海道教育委員会の参事をされていて、そこにも呼んでくださり、コーヒーをご馳走してくださった。筆者は、三浦先生から、「若い人を育てる」ということを学んだような気がした。筆者も若さでエネルギーで新しい仕事を学校や研究会のことでやってきた。情熱だけでつぱしたところもあり、あちらこちらで失敗もした。でも、そういった中で、だんだんと仕事を覚えてい

ったし、細かい配慮も気がつくようになってきた。先生は、いつもニコツとして、でも、しっかりと筆者たちのやることを支えてくださっていたのである。

だから、講演は筆者の心の中では、三浦先生と決めていた。でも道立教育研究所の所長さんは、そう簡単に講演に来てもらえるような立場ではなかったようだ。まして、遠い函館まで来ていただかなければならない。そんな難しい課題があったが、この年から、会長になった藤城小学校校長（当時）F先生が、動いてくれ、見事講演者に三浦先生が決まったのである。渡島情報研には、いつも力のある先生がいて、事がうまく運んでいくのを感じた。当時の情報研究のメンバーはそうそうたるものである。幹事長のK先生、事業部長のM先生、副事業部長T先生、研究部長のI先生、副研究部長のS先生、広報部長のN先生、副広報部長のT先生、役のある人たちは一人として幽霊の役職はいない。みんながこの10周年に力を注いでくれた。それに先輩にあたるI先生、M先生、そして、檜山からの力強い見方K先生、ITのプロフェッショナルのO先生、授業という大役を引き受けてくれたB先生、当日の運営に携わってくれたI先生。その他、たくさんの第一線で動いてくれるメンバーがそろい10周年の計画は進んでいった。筆者も会計という立場で、会の推進に尽くした。

ところが、平成14年10月4日のこの記念すべき10周年記念行事を前にして、筆者は披露で倒れてしまい、参加できなかった。しかし、後日大成功との知らせが届いて、不完全燃焼ながらも喜びを共にした。

また、この年から、研究紀要をCD化した。筆者にとって、紀要は「紙」でずっしりしたものであるというのが筆者の概念であるが、これをぶち破ってくれた。そしてさらに紀要は渡島情報研のホームページにもアップされ、インターネット上から見るようになるようになった。<http://www.oshima.edu-japan.net/kiyou.html>

研究紀要は会の財産だと思っている。それまで筆者は財産が本棚に並んでいて満足していた。今でも平成6年度から、筆者が手がけて毎年作った紀要が目の前にずらっと並んでいる。でも読み返すことは滅多になかった。並んでいることに満足していたのである。それに比べて、インターネット上あるいはCD（ほとんどネット上が多いが）であると、使える紀要になるのである。自分はどの年にどんな研究をしたかは大体頭に入っている。でも誰がどのようにやったかなどをひもどいていくには、ネット上にあると非常に便利なのである。いつでもどこでもという感覚はすばらしい。まさに使える紀要である。全国どこにでも紹介することができる。インターネット上であるゆえに、配慮しなければならないことには十分に気をつけながらも、この取り組みは是非続けていってほしいと思う。新しい執行部の英断に拍手を送りたい。

・それ以降

以後、このことを一つの契機としながら、渡島情報教育研究会は、基盤をより磐石なものにしていった。特に若手役員が新しい会員の勧誘に力を入れ、会員の数も増え、また、研究内容も充実したものになっていった。自分はその年ぐらいから、今まで全ての事に先

頭グループで、風を切って事業を進めてきたが、一步引いて会の運営に携わるような気持ちになっていった。もちろん今でも先頭グループの後半ぐらいには位置しているつもりではあるが。新しいM幹事長を中心に、会は確実に進歩している。

平成16年度、久しぶりに研究授業をやらせていただくことになった。自作のコンテンツを使った理科の授業を公開した。前年度に道立教育研究所のデジタルコンテンツ作成委員になったことから、環境に関わるコンテンツを自作し、それを使った授業を行った。このソフトのねらいは、電気自動車の仕組みを通して、地球環境を大切にしてもらおうというものである。筆者は函館市環境部に電気自動車があることをホームページで見て、早速連絡を取ってみた。環境部の担当も快く引き受けて下さり、ビデオカメラによる撮影を、校長先生にお願いし、環境部に取材に出かけた。電気自動車は思ったよりも古かった。そして、性能がよくなく、あまり使われていないこともわかった。でも排気ガスを出さない。静かである。そういうメリットは兼ね備えていた。筆者は担当のSさんにインタビューをする

形で、電気自動車導入のきっかけや、しくみ、普通の自動車との違い、乗ってみての感想、そして、子どもたちに期待することを聞いていった。校長先生は、カメラ操作については、とても慣れている方で、上手に撮影していただいた。あとは、編集である。ビデオ編集はその年の渡島情報教育研究会の夏のビデオ編集講座のその基本は覚えた。Windows Movie MakerというWindowsについてくる付属のソフトを使うと、マウス操作で簡単にビデオ編集ができるのである。講習は受けて、その原理はわかっていたが、自分でやるのは初めてである。実は12月の取材で、平成16年の1月には、道立教育研究所のデジタルコンテンツ検証授業をやらなければならないことになっていたので、いわば土壇場の教材作りであった。筆者は冬休みの多くの時間を電磁自動車のビデオ編集に費やした。音声があまりはっきり入っていなかったこと、また、パソコン教室でそれぞれの児童が操作することを考えると、テロップを入れたほうがいいということになった。声にあわせてテロップを入れることがこれほどまで、めんどろなことであるとはやって初めて実感した。微妙なずれを直すのに何日もかかった。また、このビデオを誰でもが簡単に操作できるようにするためには、特別な操作をさせてはいけないと思い、HTML形式(ホームページの形式)とした。ホームページのフレームの中に動画を貼り付けていくのは、道立教育研究所の冬の講座で教わった。ホームページの中にあるボタンをクリックすると動画が動くようになり、ようやくソフトが完成したのである。

授業は、6年生を使って行った。「人と環境」という教材の中で、筆者たちが地球環境を保護するために、どのようなことを行ったらいいかという学習である。子どもたちは、函館市がなぜ電気自動車を買ったのかという課題について、筆者の教材を使って学習した。教材の中にもあるが、電気自動車は、一般自動車に比べて価格が高い。また走行距離も限られているなどのデメリットもある。それにも関わらず函館市が環境部に電気自動車を購入したのは、市民の意識の向上につなげてほしいということが大きかったのであろう。

子どもたちにこの授業で学んでほしかったのは、たとえ、小さなことでいいから、自分たちで、地球環境に優しくできることは、やっていこうということである。子どもたちからは、「ゴミの分別」、「電気をこまめに消す」、「水道の水を大切に使う。」など、身近なことの発表がたくさんあった。筆者は、子どもたちの考え一つ一つをマジックで紙に書かせ、それを黒板に貼っていった。自分の意見を書いて貼ることで必ずもってほしかったし、ほかの人がどのような考えを持っているか知り、共通理解していこうと考えたわけである。自分でいうのもおかしいかもしれないが、子どもたちは、自作教材を使いながら、この時間の授業の目的を達成したように思う。

以前の自作ソフト作りのところでも述べたが、自作教材は誰にでも作れるものではないことは確かであり、それを求める必要もないと思う。ただ、作ったものは財産になるということである。特にデジタルで作ったものは、ファイルとして、簡単に複製し、人に渡すことができる。また、筆者の作った教材は、今もインターネット上においてある。

<http://www.hakodate.gr.jp/sasaki/contents/>

それぞれの先生が作ったものを共有していくことが大切だし、どこにどんな教材があるか、そのデータベースを整備していくことも今後の大きな課題といえよう。

1.4.10 そして平成17年度

今年度の講習会もエクセルをやった。今までエクセルは必ず筆者が講師をしていたが、今年は、事業部のI先生（七重小）、B先生（石倉小）に委ねた。そして、初めて、エクセルの中級にも挑戦した。若い先生のパワーはすばらしいものである。忙しい中ではあるが、とてもわかりやすいテキストを使い、定員にほぼ満ちた受講された先生たちに丁寧に指導していった。筆者はアシスタントとして、受講された先生方について回った。講習が終わって、「本当によくがんばったね。大成功だったね。」と声をかけてあげた。

そして研究大会も新しい試みであった。正式な形ではないが、中学校と高等学校で連携を組み、チームティーチングを行ったものであった。福島商業高校の情報のO先生が、福島中学校の技術のD先生とチームティーチングを組んで、プログラミングを教えるというものであった。道立高校と公立中学校が正式な形で提携を組んで研究を進める場合もあるが、お互いの人材同士が近くにいるのだから、手を組んでやってみようというそんな試みが快い。中学生といえども、プログラミングの腕はなかなかのものである。子どもたちは可能性に秘めているということを実感した。

以上述べてきたように、筆者の情報教育の実践が渡島情報教育研究会と重なるところが実に多い。物事の企画を立てて推進し、そして成果を出してきた。それが今の自分の血となり肉となっていることを感じる。渡島に来て、30歳代のエネルギーの多くをこの渡島情報教育研究会にかけてきた。その中には述べてきたように様々な人たちの出会いがあり、筆者に叱咤激励、指導をいただき、育ててもらった。今40歳代半ばを過ぎ、第一線で活

躍しながらも、「若い世代の育成」ということを常に頭におくようになってきた。特に情報教育の世界は、目まぐるしく発展しつづけていく。コンピュータやネットワークの発展は日進月歩であり、10年前の実践は、今ではもう役に立たないことが多い。

筆者の生き方の一つとして、同じ原案を使うのは3回までというポリシーがある。全てがこのようにできるわけではないが、そう努めている。確かに、前の年の年月日だけを直して物事を進めるのは、とても楽である。それなりの成果もあげられることができよう。ただ、自分としては、それ以上同じ原案を使うと、マンネリの気持ちが入ってきてしまう。楽をしてしまう。そうすると新たな感動が得られない。自分に感動がなければ、他人が受ける感動も少なくなってしまうのではないかと思っている。だから、何回かやったら、日付直しだけするようなことはしないようにしている。もう一度、その企画の目的を考える。筆者の原案の最初は、いつも目的である。迷ったときはいつでも「何のためにやるのか。」ということに戻ることにしている。今までのことを踏襲していくのがベストであればそこはそれでいい。そしてどこかに新しい風を吹き入れていきたいと思っている。

渡島情報教育研究会は、磐石な土台の上に、今も心地よい新しい風が流れていると思うし、筆者にはそれが心地よい。

渡島情報教育研究会は、手前味噌ではあるが、渡島の情報教育の発展には欠かせない組織であったであろうし、事実、様々な企画を考え、実行してきた。筆者はいつでもその第一線にいたことができたことを誇りに思っている。今後、情報社会がますます発展し、学校教育においても教育の情報化が進むと共に情報教育の必要性もますます高まってくるであろう。渡島情報教育研究会は、これからも、時代に求められているものを敏感に感じる空気を持ち、それに対応するような情報の提供、研究会や講習会の実施、その他、新しい企画を推進し、渡島の情報教育発展のために、力を発揮していきたい。また、いつの時でも、第一線の実践者として、筆者もその中に名を連ねていきたいと願っている。